

63歳で初の頂点

辻田が最年長V

2オーバー 146 辻田 昭吾 (くまもと城南) 63歳



【写真は優勝カップを手に笑顔の辻田昭吾】

元気なおじさんぶりをスコアで示した。25歳以上が出場資格のミッドアマで63歳での優勝。「若い連中は何をしとるんだ」との声が漏れそうな、そんな辻田の快挙である。「60歳を過ぎてもゴルフで戦えるということですね。今年の(競技)ゴルフはこの大会で

終わりにしようと思っていたけど、全日本があるので1ヶ月延びた。下心もなく、無欲の勝利でしょうか」と辻田はまるで解説者のようなコメントを残した。特別にはしゃぐわけでもなく、実に淡々としていた。

昨年、ホームコースのくまもと城南(熊本)での今大会には予選落ちして、本人いわく「決勝は競技委員をしていた」というのがウソのような話だ。63歳での頂点は牛島中(志摩シーサイド)の52歳(2017年、宮崎CC)を抜いて、最年長Vとなった。

初日はパープレーの72。そのスタートホールに初優勝のヒントが潜んでいた。インスタートの辻田は10番ミドルで1パットの「手が動かなかった」と顔をしかめる。そこで、11番からはグリップをクロスハンドに変えるのだが、これが奏功する。手は動くようになり、2日間で3パットは最終日12番での1度だけだった。

パットで辻田には苦い思い出がある。2011年9月8日、阿蘇グリーンヒルCCであったインタークラブ熊本北部地区予選。その12番ホールで上から1パットの弱さを外してからというもの、イップスに悩まされ続けている。辻田はチームのポイントゲッター。責任の重さが腕を硬くしたのかもしれない。その12番のことは昨日のことに鮮明に覚えている。その後、パターを何十本と変えたが、1パット前後のパットには苦しめられる。



その代わりに、ショットには自信を持つ。167センチ、60キロと細身のボディーながら、ドライバーの平均飛距離は260ヤード、当たった時は270ヤード。63歳という年齢を考えると、飛ばし屋である。「ミートをしっかりして、ボールの回転を良くする」のが辻田流の飛ばしのコツ。51歳の時、胃の全摘手術を受け、数度の骨折なども経

験しながら、ずっと第一線で活躍する姿は実に頼もしい。

「九州」という冠のついたタイトルは初。ただ、辻田は「ミッド」より「シニア」の方がバドから手が出るほど欲しかった。「去年、勝ちたかった。自滅してしまった。ショックだったね」と振り返ったのは昨年、門司GC(福岡)であった九州シニア選手権。初日、首位に立った辻田は最終日のハーフを終えた時点でも1位をキープしていたものの、バックナインで45を叩いて、5位タイに後退した。「ミッドとシニアのタイトルを換えてもらいたいよ」との言葉も本気そのもの。それほど九州シニアにかけていた。今年も第2ラウンドにスコアを落として、念願は成就できない上に日本シニア出場も逃した。

とは言っても、ミッドの九州チャンピオンである。得意のショットを武器にシニアの分のうっ憤を晴らしてもらいたいものだ。



【写真は上位の選手たち】

◆2位・3オーバー 147 川口 亮(ブリヂストン)



初日は4バーディー、2ボギーの2アンダー70で回って、トップタイ発進3人のうちの1人。最終日のアウトは40。この時点でトップとは1打差がついた。インは37で回りながらも1打及ばなかった。「もっとアウトで粘っていれば」と悔いは残る。連盟競技主催では初めての

最終組。この経験が今後必ず生きるはず。日本ミッドアマ出場も初めてとなる。

◆3位・4オーバー 148 江口 信二(大博多)



いつも笑顔の絶えない江口が3位に「最終組はいけません。やはり緊張しました」とさぼさぼとした表情を浮かべた。初日は得意のアプローチとパットが冴え、5バーディー、3ボギーの70で回って、首位タイスタート。が、最終日は39・39のスコアで初の栄冠がスルリと逃げ

てしまった。九州の頂点には立てなかったものの、3年ぶり2度目の日本ミッドアマの出場権を手にした。